F/T12
FESTIVAL/TOKYO

東京文化発信プロジェクト

夢の城 - Castle of Dreams / ポツドール
作・演出：三浦大輔
Castle of Dreams / potudo-ru
Text, Direction: Daisuke Miura

11/15（Thu）- 11/25（Sun）
東京芸術劇場 シアターウエスト
Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre West

TOKYO 2020 CANDIDATE CITY
2020年オリンピック・パラリンピックを日本で！

© Norimichi Tomita

三浦大輔インタビュー
ヨーロッパの『夢の城』―― 2006年の〈虚無感〉から ――

――『夢の城』(06年)は三浦さんが『愛の渦』(05年)で岸田國士戯曲賞を受賞された直後に発表された作品であり、岸田賞受賞作家がいきなり劇作家であることを放棄したかのような無言劇を発表したことで賛否両論を呼びました。またドイツで3年ごとに開催されるTheater der Welt国際演劇祭に2010年に招聘されて以後は海外での再演が続いています。なぜ初演から6年経ったいま、この作品を再び日本で上演しようと思われたのかまず教えてください。

理由は二つあります。まず一つは、海外ツアーを経て完成度が増した作品を観てもらいたいと思ったこと。実は、この作品の初演時には、自分のなかでまだ消化不良で終わってしまったような感覚がありまして。作品の本質が掴めないまま終わってしまったと言いますか、そこに「何か」はあるんだろうけど果たしてそれは「なんなのか」と。だけどいざ海外に持っていくと決まり、僕らのことをまったく知らない人に見せるということを考えたとき、作品の本質をもっとわかりやすく伝えるべきだなと思ったんです。それで個々のシーンで伝えたいことや動きの意図など、作品の本質をより明確化させていった。そうしたら初演時には曖昧だった「獣のような暮らしをする若者たちから、徐々に人間らしさが見えてくる」という本質が浮き彫りになってきたんです。また敢えて言ってしまえば、強度と共にエンターテインメント性も増したような気もしました。その変化した『夢の城』をもう一度、日本のお客さんに観て欲しいと思ったんです。

――二つめの理由は?

二つめの理由はもっと簡単で、役者の年齢的なことです。この作品の出演者達が、まだ、ぎりぎり若者に見えるこの機会に上演しておかないと、若者たちの集団生活という設定自体に無理が生じてしまう。だから今しか再演の機会はないと思ったんです。正直、若者たちの「無気力さ」や「無関心さ」というテーマを「無言劇」というスタイルに結びつけたこの芝居は、ちょっとした発明と言いますか、無言劇というものは他にもあるにせよ、スタイルがテーマと結びつくことによって必然的に生まれてきたようなものは演劇的手法として他にないと思うんです。だから自分のなかでも特異な芝居として、最後に、もう少し多くの人に見てもらいたいと思ったんです。

――いま「最後に」とおっしゃいましたが、今後、この作品を再演することはないということですか。

実は、しばらくポツドールの本公演の予定が日本ではないんです。そうすると出演者の年齢を考えても、もう上演する機会はないのかなと。僕の求めている空気感を緻密に再現できる役者さんじゃないと成立しない芝居なので、外部から役者さんを招いて再演するということもないでしょうしね。だからこれが最後の『夢の城』です。さらに言えば「若者たちの虚無感」というテーマを描くことも、これが最後かと思います。自分

『愛の渦』（2006年）　© 曳野若菜

も年を食ってきているので、そういう虚無感に対する切迫感が薄くなってきているんですよね。ちょうど年齢的にも転換期ですし、今回の『夢の城』は一つの締めくくりです。

―― 昨年11月にミュンヘンのSpielart Festivalで『夢の城』を再演された際には、チェルフィッチュの岡田利規さんと共に『Cool Japan ― Theater between Zen and Manga』という日本人からすると少し妙だなと思われるタイトルで（笑）、トークを行われました。そこでも日本の若者たちの虚無感に対しての質問が多かったそうですね。

はい、多かったです。日本は豊かだし平和だし、なんでそんなに虚無感を抱えて生きているんだと。そこが本当に不思議だったみたいです。だから「これは3.11の影響なのか？」という質問も受けたんですけど、それに関してもこちらとしては、日本人はなんとなくずっと絶望を抱えて生きているよと。確かに3.11はありましたけど、前々からある種の絶望感を抱きながら日本人は生きていて、それが3.11で露呈されただけだと。でもその答えもやっぱり向こうの人には「分からない」というか、「ない」感覚みたいで（笑）。自分としてはむしろその事実に驚きました。ずっとこの感覚が普通だと思って生きてきたので、海外に行って自分の抱えている漠然とした虚無感みたいなものが日本人特有のものなんだということを初めて自覚しました。あと海外では、そのトークの題にも表れているように、「日本人なんだから能と漫画にはどのぐらい影響を受けているんだ」という質問はよくされました。なんか外国人のなかでは、日本人ってなるとこの二つがまっさきに浮かんで来るみたいで。「そんなに影響受けてないんですけど」としか答えられないんですけどね（笑）。

――フランスの舞台誌『mouvement』で2010年10月にポツドール特集が組まれた際には、スキンヘッドで全裸の米村亮太朗さんが能の構えのようなポーズを取った写真が使われていました。

そうなんです（笑）。というのも、その頃は自分でも日本の文化を強調しようとしすぎてまして、舞台上でそういう動きをさせたり、テレビに映る映像も分かりやすいアニメにしたりしてたんです。でも今はちょっと変わってきてまして、そんなに外国人におもねらなくてもいいかなと思って、また演出を変えてます。

――ドイツ語圏では、キャピタリズムとヒューマニズムを対立項として捉えて、だからポツドールの作品で描かれる登場人物たちを、資本主義を極みまで先鋭化させたすえの成れの果ての人々と評する劇評も多かったです。

そう、それもかなり多かったですね。でも別にこっちは資本主義とか消費社会とかそういうことを頭で考えて「よし書こう」と思ってるわけじゃないですからね。ただ肌で感じて実感していることを書いているだけ。だけどそれが向こうの人には珍しいらしく、僕らの持つ絶望感が肌感覚でわからないから、「資本主義の成れの果て」みた

『夢の城』（2010年／ヨーロッパツアーより）

いな言葉に収めてなんとか説明しようとする。

――Gobsquad（＊1）やForced Entertainment（＊2）などのカンパニーと並べてポツドールをプログラムに組み、ポストドラマ演劇のひとつとして紹介する人たちもいるようですね。

あ、そうなんです。それは結構あって、『夢の城』も好き勝手に役者たちが、アドリブで演じているドキュメンタリー演劇みたいに思われてるようなんですけど、僕は決してドキュメンタリーがやりたいわけじゃない。覗き見感覚のフィクションを精巧に作って、お客さんには第四の壁の向こう側で、物語の目撃者として居てもらいたいので……、ちょっとそこは勘違いされているのかなと。ただドキュメンタリー演劇として捉えられる一方、ダンス作品として受け止められることもあって、それは面白いなと思いましたね。確かに『夢の城』は言葉がないぶん、動きや身振りで意図を伝えるので、そういう意味ではダンスと共通する面があるのかもしれません。

――若者たちの虚無感を描くこともこれで最後だと先ほどおっしゃいました。そのテーマをなげうったのち、今後ポツドールではどのような芝居を創作していかれるのでしょう。

わかりません。いまは正直、震災の影響もいったん収まって、宙ぶらりんな状態です。でも、そうして手探りで模索しながら僕自身変わっていくことがポツドールのおもしろさにつながると思うんです。僕はいつもお客さんに「こういう作品を見たい」という固定概念を持たずに劇場に来てもらいたいと思っていまして。「次に何をやるか分からない」からポツドールに来てもらいたい。そういう期待感が、お客さんが劇場に足を運ぶいちばんのモチベーションになると思うんですよね。

（2012年10月14日／取材・文＝岩城京子）

＊1　1994年よりベルリンとノッティングハムを拠点にパフォーマンス、ビデオインスタレーション、演劇などの作品を発表する英独混合のシアター・コレクティブ。日常に潜む劇的状況を遊戯的に作品化する方法論で有名。例えば代表作の一つである『Super Night Shot』ではメンバーが無作為に街に繰り出し、たった1時間で映画を制作。その過程と完成形を劇場で発表した。

＊2　1984年に演出家ティム・エッチェルズを中心に、6名のメンバーにより英国シェフィールドで結成されたカンパニー。現代における演劇表現のありかたを再定義するべく、舞台芸術の方法論じたいを表現の主軸に据え、その革新的な手法が話題を呼ぶ。代表作に6時間に渡り2000個の質問について思考する『Quizoola!』など。

三浦大輔：脚本家・演出家・映画監督、ポツドール主宰

1975年北海道生まれ。早稲田大学卒業。96年、演劇ユニット「ポツドール」を結成。以降、全本公演の脚本・演出をつとめる。2006年『愛の渦』で、第50回岸田國士戯曲賞受賞。近年の主な作品に、映画『ボーイズ・オン・ザ・ラン』（10年／脚本・監督）、パルコプロデュース『裏切りの街』（10年／作・演出）、翻訳劇『ザ・シェイプ・オブ・シングス～モノノカタチ～』（11年／演出）などがある。

「終わりなき日常」への、受容の五段階プロセス

岩城京子（演劇ジャーナリスト）

かつてポツドールの劇場を後にしたとき、なにか生々しい腐臭が染みついてしまったかのような感覚から髪先を嗅いだおぼえがある。それは彼らの名をスキャンダラスな意味で有名にした過激な性描写の精液臭であるかもしれないし、また狭い畳間で共棲する男女のゴミ溜めの腐臭であるかもしれない。だが実際には考えるまでもなく、精液臭やゴミ溜めの臭いが劇場に充満しているわけもなく、よって観客にその臭いが付着することもない。それにも関わらず――そしてこれは彼らの舞台を体験した人間なら肌で理解できるだろうが――なにか劇場中がヌメリ気を増したかのような腐臭を感ぜずにはいられないのは、なぜか。言うまでもなく、それは、作家で演出家の三浦大輔の、精敏に現実を感知しカットアップする手腕による。彼が、現実よりも異常に画素数の多い精密さで、希望も目標も尊厳もなくだらだらと人生を送る若者たちの「魂の腐臭」を描写することに成功しているからだ。

しかしなぜこれほど三浦は、負の感情に目を向けるようになったのか。筆者のこの問いに対して彼はかつてのインタビューで「自分でもわかりません。……普通すぎるほど普通な人生を送って」きたから、と素直に語っている。しかし、この普通さが恐ろしいのだ。ロスジェネ世代を少しでもかすって生きた人間なら実感として分かるように、この普通さとは、退屈すぎるほどの退屈さと表裏一体の日常だ。だからこそ三浦が成人した年の95年、社会学者の宮台真司が著書『終わりなき日常を生きろ』で「『永久に輝きを失った世界』の中で……そこそこ腐らずに『まったりと』生きていく」知恵を説いたとき、そんな未来も希望もまっとうな挫折もない生き方なんて我慢できないと若者たちは少なからず不満を感じながらも、同時に、選択肢がほぼそれしかないことを直感的に悟り、まったりと生きる試みのなかで「まったりと腐って」いったのだ。その若く甘い果肉が、除菌消臭された冷蔵庫のような平和社会のなかでさしたる深刻さもなくしなびていくさまを、ポツドールの芝居は描き切るのだ。

ただひとたび彼らの作品が西欧の劇場にインストールされると、この終わりなき日常の腐臭が、当たりまえだが、理解されない。三浦も説き明かすように、日本は経済的にも豊かだし平和だし「なにをそんなに絶望するの？」と。向こうの観客は疑問を露わにすることになる。なぜ、彼らにとってその絶望が不可解なのかを解明する因子は、一例をあげるなら社会的、歴史的、文化的、民族的に複数存在するだろう。だがここでは焦点を一つに絞り、試論を述べたい。

スロヴェニア出身の思想家スラヴォイ・ジジェクは、一昨年発刊された『Living in the End Times（終末の世を生きる）』のなかで、いつものようにラカンの精神分析とマルクス的唯物史観を援用しつつも、精神科医エリザベス・キューブラー＝ロスの「死の受容の5段階プロセス」を主幹に据えて、人類がどのようにいま末期的状況に陥っている自由資本主義経済の危機に対応すべきか

を時代の予言者のごとく語っている。要約するなら本書でジジェクは「否認」「怒り」「取引」「抑鬱」の最初の4段階を全力で生き抜いて戦ったうえで、最終段階の「許容」に至ることも人々は視野に入れるべきだと説く。西欧諸国では大多数の人間はいまだ、良くも悪くも、受け入れられない現実への否認や怒りを示す状態にとどまっている。逆転の発想として、すべてを許容したうえで新たな時代設定への兆しを模索しようという試みには進展していない。つまり彼らの大多数は、かつてのように人間らしいまっとうな生活を送れない人生なんて「ありえない」と考えており、だからオキュパイ運動や、市民ジャーナリズムや、海賊党などの新たな民主主義のかたちを立ち上げ、自分たちのあるべき姿のために抗い、戦い、取引をはじめるのだ。

要は、西洋人の多くは人間らしい最低限の生活への、あるいはより大胆に述べれば、基本的なヒューマニズムへの揺るぎない信念を持っており、それを武器に堂々とアクションを行使する。しかしなぜか日本人は、いきなりレベル4と5を合体させたような「抑鬱的な許容」に飛んでしまう。より具体的に語るなら、日本人は正論や理想論を掲げて、現実を否定したり、怒りを爆発させたり、権力と取引したりすることが、どうにも不毛だという考えを生の前提条件としてなぜか了解しており、だから原子力政策や、福祉手当や、自分の日々の給料明細に不満がありながらも、大方のことを許容といよりも看過して、まったり虚しく生きていく。さらに平成生まれの「ゆとり世代」の芝居などを見ていると、スコーンとレベル5に飛んでしまって、虚しくもなんともなく現実を許容して不感症的に現実を楽しんでしまっているように思えることもある。だが、まだ三浦の世代はそこまで吹っ切れない。彼の場合は、この虚しさに、消費のオーバードースから来る受容感覚の麻痺状態も加えて、生への手応えのなさを膨張させていく。

このような諦念にも近い絶望が、まだレベル1から3の間を真摯に行き来している西欧の観客にはどうにもわからない。そしてあまりにもわからないからこそ、ポツドールの芝居が末恐ろしい。つまり、意外に感じられるかもしれないが、西欧の観客の多くはポツドールの芝居の性モラルの劣悪さにではなく、それも含めたヒューマニズムの劣化に過激さを感じているのだ。例えばドイツKulturvollzug誌の批評は『夢の城』を「オルガズムを感じるまで消費する資本主義の掟」のなかで「“人間的な人間”と“価値のある人生”の定義の裏」を探求する試みだと解説している。啓蒙的な人間中心主義を日本人以上に信じる人々にとっては、獣かはたまた現代の消費マシンのように生きる登場人物たちは、まさにヒューマニティへの脅威なのだろう。

最後に一言付け加えるなら、西欧の人々がポツドールの登場人物たちを「自分たちと同じ人間」として受け入れ、そこからの自己省察を深めているかと問われると、それは必ずしもそうではないように思う。おそらく彼らからすれば、自分たちと地続きの世界ではあるけれど、どこか遠い場所に住む異なる種族の生態を眺めている、という感覚のほうが強いように思う。ポツドールの芝居を「ドラマ」としてではなく「ポストドラマ」あるいは「ダンス」として捉えて評価する批評家が多いのはその証左だ。日本の観客が第四の壁の向こうで描かれるドラマに求心的に飲みこまれ同時代の腐臭を「体感」せざるを得ないのとは異なり、彼らの多くは枠付けの向こうで生きるインヒューマンなオブジェたちを遠心的に「観察」しているのだ。もちろんこうした受容の差異があったうえで、作品が認められる事実は良いことであり、ポツドールの舞台の芸術的強度を示している。ただもし万が一にも、西欧の人々が否認や怒りの段階を超えて現実の不毛さを抑鬱的に許容してしまう時がきたら、ポツドールの芝居の観劇後、髪を嗅ぐようになるかもしれない。

作・演出：三浦大輔
出演：
米村亮太朗、古澤裕介、鷲尾英彰、井上幸太郎、松浦祐也、
遠藤留奈、新田めぐみ、宮嶋美子
舞台監督：筒井昭善
舞台美術：田中敏恵
照明：伊藤孝（ART CORE）
音響：中村嘉宏
映像・宣伝美術：冨田中理
小道具：河合路代
照明操作：櫛田晃代
演出助手：飯塚克之
選曲：米村亮太朗
大道具製作：ステージ・ファクトリー
写真撮影：曳野若菜
公演記録：カラーズイマジネーション
制作補佐：丑山佐枝子、石井 舞
制作：木下京子

協力：ゴキブリコンビナート、THE SHAMPOO HAT、スターダス・２１、
ぱれっと、バードレーベル、ダックスープ、オフィスPSC、
アンドフィクション、高津映画装飾、帯瀬運送、スペーステン

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也
制作：河合千佳、小森あや、喜友名織江
フロント運営：赤羽ひろみ、安部祥子
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/Tクルー
一ノ瀬貴志、宇都宮千陽、大泉尚子、緒方彩乃、川口 茜、佐藤杏子、
佐藤友香里、能戸みな美、矢島 絢

製作：ポツドール
製作協力：マッシュ
主催：フェスティバル/トーキョー

Text, Direction: Daisuke Miura
Cast:
Ryotaro Yonemura, Yusuke Furusawa, Hideaki Washio, Kotaro Inoue,
Yuya Matsuura, Runa Endo, Megumi Nitta, Yoshiko Miyajima
Stage Manager: Akiyoshi Tsutsui
Stage Design: Toshie Tanaka
Lighting: Takashi Ito (ART CORE)
Sound: Yoshihiro Nakamura
Video, Publicity Design: Norimichi Tomita
Props: Michiyo Kawai
Lighting Operation: Akiyo Kushida
Assitant Direction: Katsuyuki Iizuka
Music Selection: Ryotaro Yonemura
StageProduction: STAGE FACTORY
Photography: Wakana Hikino
Video Documentation: Colors Imagination
Production Assistant: Saeko Ushiyama, Mai Ishi
Production Co-ordination: Kyoko Kinoshita

In co-operation with gokiburi kombinat, THE SHAMPOO HAT, Stardas21,
Palette, BIRD LABEL, Duck Soup, Office PSC,
& FICTION!, TAKATSU CO.,LTD, OBISE UNSOU, SPACE ten

F/T Sraff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinator: Chika Kawai, Aya Komori, Orie Kiyuna
Front of House: Hiromi Akahane, Shoko Abe
Program Director: Chiaki Soma

F/T Crew
Takashi Ichinose, Chihiro Utsunomiya, Naoko Oizumi, Ayano Ogata,
Akane Kawaguchi, Kyoko Sato, Yukari Sato, Minami Noto, Aya Yajima

Produced by potudo-ru
Production co-operation from MASH
Presented by Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー組織委員
Festival/Tokyo Organization Committee

天児牛大	振付家、演出家
荻田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター会長
蜷川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

（五十音順）

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、
東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima city, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre
(Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation,
Arts Network Japan(NPO-ANJ)

共催：社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテル メトロポリタン、ホテル グランドシティ、チャコット株式会社、株式会社白水社

Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, Sunshine City Prince Hotel,
Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakusuisha Publishing Co., Ltd.

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima,
Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association,
Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエクストラサポート（公募プログラム）

PR support: Poster Hari`s Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ART iT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ART iT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年（2012年）10月27日（土）～11月25日（日）

フェスティバル/トーキョー実行委員会
Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登（骨董通り法律事務所）	

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshisue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、椙山由香、 戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウトハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネート	小山ひとみ、李丞孝
票券管理	長原理江、宍戸円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色壽好
経理	堤久美子
制作アシスタント	小野塚央、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠那葉奈
アジア事業コーディネート補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里
技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネート	佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響コーディネート	相川晶（有限会社サウンドウィーズ）
アートディレクション＋デザイン	アジール（佐藤直樹＋中澤耕平＋谷陽子＋徳永明子＋菊地昌隆）
ウェブサイト	濱田真一＋田中裕也（株式会社ロフトワーク）
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリューズ・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆（「TOKYO/SCENE」）	影山裕樹

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuike
Assistant Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Kawai, Orie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujii
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Program Research: Ulrike Krautheim
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee
Ticket Administration: Rie Nagahara, Tsubura Shishido
Ticket Office: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanoiri, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Nanana Kanmuri
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Maiko Yoshioka
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabata, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kono
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction+Design: Asyl (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada+Yuya Tanaka (loftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akihiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kageyama

F/Tクル－: 会津麻美，青島美和，安達 彩，石引康子，一ノ瀬貴志，岩城泰斗，上杉康政，宇都宮千陽，内海ちさき，遠藤乃利子，大泉尚子，大貿啓子，大道愛香，岡崎由子，緒方彩乃，岡本光代，岡本佳子，尾澤弥生，小野千尋，加藤真帆，鹿子木直美，金子稼為，川口 茜，木口七海，木下玉美，金セロム，許 智殷，桐谷佳美，黒沢友美，小堺寛子，齊藤 望，斎藤絵里佳，崎濱恵梨，佐藤友香里，佐藤杏子，霜鳥桃子，柴田知子，鈴木智香子，関島弥生，高橋悠祐，田中有希，寺本奈津美，照沼静香，陶 旭茹，永井彩子，中村直樹，中村みなみ，中山由紀，西岡宇行，能戸みな美，畑瀬富葵，初村和美，花田雅美，早川春菜，林原 栞，人見麻美，廣瀬加乃，福原麻梨子，福村 舞，藤原顕太，船川結菜，増渕 圭，松嶋瑠奈，松田早絵，松本雄哉，丸山未来，三鶴泰正，関 慧玟，矢島 絢，前内聖司，山口侑紀，山室木蓮，山分将司，弓野亜希，吉田由貴，米谷今日子，渡辺 更

F/T Crew: Mami Aizu, Miwa Aoshima, Aya Adachi, Yasuko Ishibiki, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasumasa Uesugi, Chiaki Utsunomiya, Chisaki Utsumi, Noriko Endo, Oizumi Naoko, Keiko Oga, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Ayano Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yayoi Ozawa, Chihiro Ono, Maho Kato, Naomi Kanakogi, Joey Kaneko, Akane Kawaguchi, Nanami Kiguchi, Tamami Kinoshita, Saerom Kim, Chiryu Kyo, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurosawa, Hiroko Kozakai, Nozomi Saito, Erika Saito, Eri Sakihama, Yukari Sato, Kyoko Sato, Momoko Shinotori, Tomoko Shibata, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Terunuma, Xuru Tao, Sayako Nagai, Naoki Nakamura, Minami Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nishioka, Minami Noto, Fuki Hatase, Kazumi Hatsumura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Hitomi, Kano Hirose, Mariko Fukuhara, Mai Fukumura, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masubuchi, Runa Matsuhima, Sae Matsuda, Yuya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasumasa Mitsuru, Hyemin Min, Aya Yajima, Seiji Yanai, Yuki Yamaguchi, Kisono Yamamuro, Masashi Yamawake, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonetani, Sara Watanabe

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会
アートディレクション＋デザイン：佐藤直樹＋中澤耕平（ASYL）
オペレーション：小林 剛
印刷：アトミ株式会社
発行日：2012年11月15日
禁無断転載

お問合せ先
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001
東京都豊島区西巣鴨4-9-1　にしすがも創造舎　NPO法人アートネットワーク・ジャパン内
TEL: 03-5961-5202
HP: http://festival-tokyo.jp/